

失敗を怖れず、チャレンジ！

今回は、世界を舞台に活動されているアルピニストの野口健さんにインタビューしました。外交官の父を持つ野口さんは、出生時から世界各地で生活し、様々な文化の中で子ども時代を過ごされました。そして、25歳の時に、7大陸最高峰最年少登頂記録を樹立されました。以降、エベレストや富士山のゴミ問題解決のため清掃登山に取り組んだり、野口健環境学校を開校し、子どもたちへの環境教育にも熱心に取り組まれるなど、幅広い分野でご活躍です。

■登山を始められたきっかけは？

実は、イギリスの高校に在籍していたときに、学校で喧嘩をしてしまい、1ヶ月停学になったことがきっかけなのです。停学期間は、学校からの指示で日本の実家に返され、反省するよう言われたのですが、父のアドバイスもあり、東京の実家を離れ、大阪の親戚宅で過ごしました。その時悶々としながらも自分を見つめ直そうと、大阪、京都、奈良に出かけては、いろいろなところを歩き回りました。奈良に行ったときには、薬師寺や東大寺大仏殿も訪れました。



そんなとき、ふと立ち寄った古本屋さんで、植村直己さんの著書「青春を山に賭けて」を見つけ、何か惹かれるものを感じて、買って読んだのです。

停学になってこれからどうしよう、学校を辞めるのか、戻るのかといった葛藤の最中、そういったタイミングで直己さんの自叙伝と出会ったわけです。植村さんは、決して恵まれた境遇ではない中、一つ一つのことをコツコツと積み重ねていって、その結果、次々と

大仕事を成し遂げていかれるのですが、そんな直己さんの生き方に、そのときは本当に強い印象を受けました。そして、こんな停学中の身の自分でもコツコツと積み重ねていけば、何かできるのではと思うようになり、植村さんの跡を追うかのように、山登りを始めることになったのです。

■子どものころ、いじめに遭われたそうですが。

3才までは中東で暮らし、その後日本に戻って幼稚園に通っていたのですが、外見が外国人みたいだという理由で、いじめられました。目立つことが、いじめに繋がるのですね。いじめは小学校の2、3年まで続きました。

正直学校に行きたくない気持ちもありましたが、私の母はエジプト人で、親子、家族の会話をととても大事にする反面、やられたらやり返しなさい、逃げ出さずに自分でなんとかしなさい、というタイプの人で、学校を休むという選択肢は考えられませんでした。

いじめというのは、いじめる中心人物がいて、まわりは、その人物に引っ張られて加担している、或いは同調しないと自分が標的になるなどの理由から、いじめに加わっているところがあると思います。私をいじめた集団にも、私のことが本当に憎くていじめているわけではない子がいましたので。そうした中で、母親の後押しもあり、いじめに立ち向かい抵抗を続けていると、いつしかそういう子どもたちと仲良くなっていました。負けずに立ち向かったことで、最終的には、いじめを克服することができました。

しかし、自分で何とかしようといじめに立ち向かったことは、結果論として、私には合っていたと言えるだけで、すべての子どもに当てはまるわけではありません。ときには立ち向かうことも必要ですが、一方で、逃げるということも大事な選択肢の1つだと思います。

登山に例えると、状況が悪く遭難する可能性が高いときには、撤退することに躊躇してはいけません。エベレスト登頂をめざしていると、「無理しないでね」という言葉をかけて

いただくことがあるのですが、八千メートルを越える山にチャレンジするとき、無理せずに登れる山などありません。しかし、「してもいい無理」と「してはいけない無理」があるのです。山の天気が悪いとき、体調が悪いときには、撤退する勇気も必要です。

一方で、日本人はどこかで逃げることは恥だと考えてしまうところがあったり、支えてくれている支援者のことを思うあまり「してはいけない無理」を強行し、何人もの登山家が命を落としているのです。ですから、状況が悪いときには引くことも命を守ることにつながるのです。

いじめについても、本人の力だけではどうにもならない場合も多いですから、逃げる勇気、一旦引くということは本当に大事なことだと思います。いじめに立ち向かうだけでなく、例えば、もし学校を変えることができるのなら、転校を考えてみるというのも1つの選択肢だと思います。人生において、ずっと攻め続けるわけではなく、引くべきときに一旦引くことは、とても大切なことだと思います。

■子育てで心がけていることはありますか。

仕事柄、遠征等で家を空けることが多く、娘と普段一緒にいることは少ないのですが、可能な限り、いろんな場所、現場に連れて行くようにしています。それに伴って、親子の会話も多くなっているように思います。

今、娘は中学2年生ですが、小さいときから山登りはもちろん、富士山清掃活動に連れていったり、東北大震災で津波被害を受けた場所などにも連れていきました。私の親としてできる役割として、現場に連れていき、いろんな世界を見せて、実際に見て聞いて感じさせることは、とても大切なことだと思います。

そうした経験を積んだからか、昨年発生した熊本地震において被災者支援で開設した避難所テント村に連れていったときには、自ら清掃に取り組み、自分も人の役に立てるということを実感していたのではないかと思います。



様々な現場で、当事者そのものになることはできなくても、当事者の思いを汲んで、近づく努力はできると思います。そうすることで、求められていることに目を向け、人の役に立つことができるのだと思います。

■子どもたちへのメッセージをお願いします。

何かを試してみたいけど、何をしたいのか、何をすべきなのかわからない子は、けっこう多いのでは、と思います。また、やるからには、きちんとやらないといけないだとか、形になっていないと行動を起こせないなどと、堅く考えがちなのですが、まずは、いろいろ活動してみて、試してみることです。とにかく何でもいいからやっていく中で見えてくるものがあると思います。

子どもの頃は、失敗を怖れず、何にでもチャレンジして欲しいと思います。いろいろ経験している中で見えてくるもの、逆に失敗することで見えてくることがありますから。そういった積み重ねの中で、必ず自分の本当にやりたいことが見えてくると思います。

Profile

アルピニスト 野口 健 さん

1973年、アメリカ・ボストン生まれ。

亜細亜大学卒業。

99年、エベレスト(ネパール側)の登頂に成功し、7大陸最高峰最年少登頂記録を25歳で樹立。

日本兵の遺骨収集活動にも取り組む。

2011年の東日本大震災を始め、ネパール大地震、熊本地震などでも支援活動を展開。

亜細亜大学客員教授、了徳寺大学客員教授。

千葉県環境大使、総社市環境観光大使。

NPO法人ピーク・エイド理事長。

公式ウェブサイト <http://www.noguchi-ken.com/>